当日資料４

特集 認め合い、ともに生きる社会へ
―（副題○○○○○○○○○○○○）―

今は健康でも、突然の病気やケガが原因で障がいを抱える可能性は全ての人にあり、私たちにとって、障がいとは身近なもの。それなのに、障がいについて、意外と知らないことばかりという人は多いのではないでしょうか。

今月号では、障がいのある子どもをクローズアップし、どのように日々暮らし、何に困っているのか、そのために私たちは何ができるのか、一緒に考えてみませんか？

問福祉課　☎内線●●●　障がい福祉担当 FAX（●●）●●●●

子育ち・子育ては地域の受け入れがあってこそ

「私たちは、障がい児を育てようと思っているわけではないんです。我が子を育てていきたいだけなんです。どうしてそれを理解してもらえないのか…。」

軽い知的な障がいと発達障害の特性を持つお子さんのお母さんの言葉です。我が子の成長について、どう子育てしていけばよいかを相談したところ、その子の障がいについての説明をされたようです。お母さんの知りたかった「我が子」の子育てについて一切触れられなかった悲しさ、口惜しさの言葉でした。

親にとって自分たちの子どもは「子」でしかありません。すべての親が我が子の健やかな成長を願っていることでしょう。一方、その思いとは裏腹に、「親としての子育ての不安」それによる「親としての子の育ちの不安」を同じくらい抱えているのではないでしょうか？

「我が子」が家族だけでなく「地域」から「子ども」として認められ、受け入れられなければ、家庭だけで「子育て・子育ち」を抱え込むことになります。

「我が子」が地域に受け入れられているからこそ、親が生き生きと子どもを育て、比例するように子どもがその子らしく健やかに成長していくのだと思います。

「子どもは子どもでしかない～とあるお子さんとご家族のエピソード～」

「子ども」にはどの子どもにとっても必要な配慮が必ずあります。その配慮は子どもによって違い、それが「その子にとっての特別な配慮」なのです。そして、どの子どもにも共通する配慮は、受け入れた温かな眼差しではないでしょうか。

▦乳幼児期

ある公共の場でのこと。落ち着きがなく駆け回り、目につくものを手当たり次第に触れていました。人の目が気になり、子どもに注意しましたが全く聞いてもらえず、つい厳しい口調で注意した時、「好奇心旺盛で活発なお子さんですね」と声をかけられました。目から鱗とはこの事で、子どもの事を見つめ直すきっかけになった大事な言葉です。

▦小学校期

小学校の卒業式前、行きつけの床屋さんに行きました。マスターから「小学校卒業と同時に、床屋にお母さんと一緒に来るのも卒業だな」と、話をしていただいた事をきっかけに、息子もその気になり、親としても背中を押してもらえた気持ちになりました。

中学からは一人で床屋に行っています！

▦中学校期

息子は、放課後や休みに一人で出かけるようになりました。一緒に買い物などに行くと、知らない方が息子に声かけや、挨拶をしてくださることがあります。驚きもありますが、地域に見守られ、つながっているということを感じ、嬉しくなりました。

▦高校期

高等部から養護学校に進み、その養護学校の卒業式の帰り道でのこと。中学時代の同級生とばったり出会いました。久しぶりに会った子どもに声をかけてくれ、本人も嬉しそうに話をしていました。さらに私にとって嬉しかったのは、数日後の中学時代の同窓会にお誘いいただいたことです。当日、本人が誰よりも嬉しそうに出かけて行ったのは言うまでもありません。

「障がいのある人も、ない人も安心して暮らせる地域」を目指して

障がいのある方やご家族への日常生活の相談を行う相談支援専門員さんへインタビューを行いました。

○○○○○○○○○○○○